

高雄空港からタクシーに乗ってすでに半時間になる。車は一筋の道を不安げに走り続けている。道を聞こうにも、道の両サイドには家が立ち並んでいるのに人影はまったくなく、営業中の商店すらない。

車を降りると、空から日本の軍歌が降っている。それを頼りに、ようやく訪ねあてた先は、何の変哲もない小さな廟だった。がらんとした境内に人影

由来を問うまでもなく、老人は恒例の儀式のように、ぼつぼつと語り始める。要約すると、次のようになる。

太平洋戦争末期、高雄沖でも激しい海戦が展開された。終戦の翌年、漁船の網に頭骸骨がかかった。村人たちは話し合って、鄭重に埋葬することにした。ところが、ある夜、漁民の夢に大日本帝国海軍の軍人が立ち現れ、自分は第38号軍艦の艦長であると告げた。

ジオや無線、ウイスキーも積み込んだ。やがて、高雄紅毛港「保安堂」は、日本の軍艦を祀った希有の廟として世間知られるようになるのである。

全長9尺の第38号艦は、毎年旧暦の8月8日の祭日に廟から引き出され、まるで神輿のようにして、若者たちに担がれて村内を練り歩く。また村人は、故郷に帰りたいという艦長の願いを叶えようと、十数年前か



はなく、しばし立ち尽くしている私に一人の老人が近づいてきて、本堂脇の建物に招き入れた。

まさかと思っていたが、そこにお目当ての「神」はいた。軍艦の形をしたご神体。その側面にはわざわざ「につぼんぐんかん」と平仮名で書かれている。船上には水兵の姿、前面に焼香台、後方の壁に軍艦旗、スイッチを入れると電気がつき、砲台が回る。

## 第二十三回——柳本通彦 軍艦を祀る廟



やなぎもと・みちひこ 住先 台湾 京都生まれ。著書に「台湾先住民の聖戦」(現代書館)、「台湾革命」(集英社新書)、最新刊「明治の冒険科学者たち」(新潮新書)など。

村人たちは恐れおののき、廟で鄭重にお申いをした。それから、数十年の時が過ぎたある夜、再び艦長が村民の夢枕に立ち、沖繩に帰りたいから船を造ってほしいと頼んだ。村の人はまず驚き、船大工を招いてお告げどおりの船を「建造」させた――。

これが1991年というから、ごく最近のことである。以来、艦長から「指示」がある度に船の設計を修正し、ラ

ら、定期に「沖繩詣で」の一行を送り込んでいくという。案内された事務室には、沖繩での記念写真がずらりと並べられ、アンプの前には、軍歌のテープが積まれていた。

なにも返す言葉もないほどに、老人は真剣だった。日本語は話せず、日本びいきというわけでもなさそうだ。まさに信仰なのである。論評の余地がない。廟は、台湾海峡に長く突き出た砂州

上にある。17世紀中葉、鄭成功が明の残兵を率いて台湾を攻略し、南部を支配していたオランダ人を追っ払った際、オランダが最後の砦としたのがこの港だった。以来、当地は「紅毛港」と称され、台湾南部有数の漁港として栄えた。しかし、しだいに高雄一帯の工業化が進み、当地もコンテナ基地として再開発されることになり、全村移転が決定された。その後、家屋の新政策が禁止されたため、村はしだいに荒廃し、寂れているという。

その真つ只中に、「保安堂」は建つ。村人は海の藻屑となつた水兵たちの霊よ鎮まれと敬虔に祈り続けている。しかし、櫛の歯が欠けるように人は去り、保安堂の移転先もまだ決まっていない。艦長の魂は今も彷徨い続けている。



紅毛港へは小港または高雄空港からタクシーで約30分。取材協力：紅毛港文化協会